

舞踊学会の節目節目に

古井戸 秀 夫

舞踊学会40周年記念の特別企画として、松本千代榮先生のお話をお聞きする機会を得たのは、2015年の春から夏にかけてでした。久しぶりに音羽のお宅に伺うと、玄関に書道では「大字（だいじ）」というのでしょうか、大きな漢字の額が目に入ってきました。千代榮先生が揮毫されたものだそうで、有川いづみさんにうしろからサポートされて、太い筆にたっぷり墨を付けて、いっきに書くのだそうです。うれしそうに話される、そのお姿を見ていると、こちらまでが爽やかな気分になりました。奈良で子供たちと一緒にいたころ、先生が即興でピアノを弾くと、男の子が風のように飛んだ、そう話される先生のお姿と、その男の子が重なるようでした。先生が生涯、探求し続けた「舞踊美」の原点は、そこにあるのではないかと思います。

戦前の東京女子高等師範では、ピアニストの宅孝二先生の大ファンだったそうで、恩師の戸倉ハル先生からは、「あんたの組は、宅先生ファンだからね」と、おっしゃる声も弾んでいました。体育科の生徒の名前をすらすらと並べられ、スキーの実習で声をそろえて歌った、「日本中から集まって、押しも押されぬ体育科、頑張り娘20人、チャッチャチャチャ」は、宅先生の作曲なのと。戦後、奈良に戻って、また子供たちと一緒にになると、悩んだのはピアノの演奏だったそうです。放課後、体育館のピアノで練習に励んでいると、教頭先生が立ち寄られ、「若いのに、よく勉強しますね」と声をかけてくださった。そのありがたさを、今度は若い人に。わたくしも、そのような恩恵を頂戴した、そのひとりでした。

大学に移られた後、実技の指導は若い人に任せたとおっしゃいました。体が動く優秀な人がいましたから、とも。新しい教育分野を切り開くには、研究のその成果が求められます。大学に続いて大学院、博士課程の設置、そのためのご努力の結晶が『舞踊美の探求』だったのではないのでしょうか。教育学・体育はもちろん、哲学美学、芸術史の文献を渉猟、それらをまとめ、体系化された。30代という若さと情熱が成し遂げた、結晶でした。同時に先生は、授業の記録も、たんねんに遺されました。私学で育ったわたくしも、縁あって国立に移り、新しく開設された学問分野に携わるようになり、ようやく、千代榮先生のお立場が、おぼろげながら理解できるようになりました。学会の

設立と運営も、そのためにはなくてはならないものでしたのでしょう。

「戦後50年の舞踊教育」というシンポジウムは、舞踊学会設立20周年に企画されました。郡司正勝先生が逝去され、松本千代榮先生にバトンタッチされた、そのときでした。司会進行をするようにおおせつかりました。打ち合わせで、「戦後の舞踊教育をひと言でいうと、どうなりますか」とお聞きしたところ、即座に「戦前は、外国から習ってきたものを教える、戦後は学生が考えること、思っていることをかたちにする」と応えられました。先生が重視されたのは、そのためのカリキュラム編成と、そこから育った卒業生でした。計画とその成果。「われわれの時代にとって舞踊とは何か」という特集3冊も、千代榮先生の発案でした。先生が特にこだわられたのは、「われわれの時代」でした。

郡司正勝先生の卒論指導で音羽のお宅に伺ってから、もう50年。はじめは、恩師の奥様。10年後に舞踊学会の事務局をお引き受けしてからは、郡司松本両先生にお仕えしました。郡司先生が歌舞伎の演出をされる際には、カバン持ちをしていました。ちょうど、エリザベス女王が来日されたときでした。お迎えに上がると、雰囲気がおかしいのです。テーブルの上を見ると、朝日グラフ。郡司先生の顔がはんぶん、切れていました。松本先生はというと、女王陛下とにっこり笑っているではありませんか。郡司先生のご機嫌は悪く、松本先生は得意そうなお顔でした。目黒の羅漢寺で門下生の皆様に交じってお別れをさせていただいたとき、そのときの先生のお顔を思い出しました。お見送りのために外に出ると、土砂降りだった雨が上がって、青空が広がっていました。千代榮先生らしい旅立ちだ、と思いました。